



不知火物語第三十七編上

種彦作  
種彦技

廣幸板

13  
3223  
34



志羅 怒火 物語



種員記

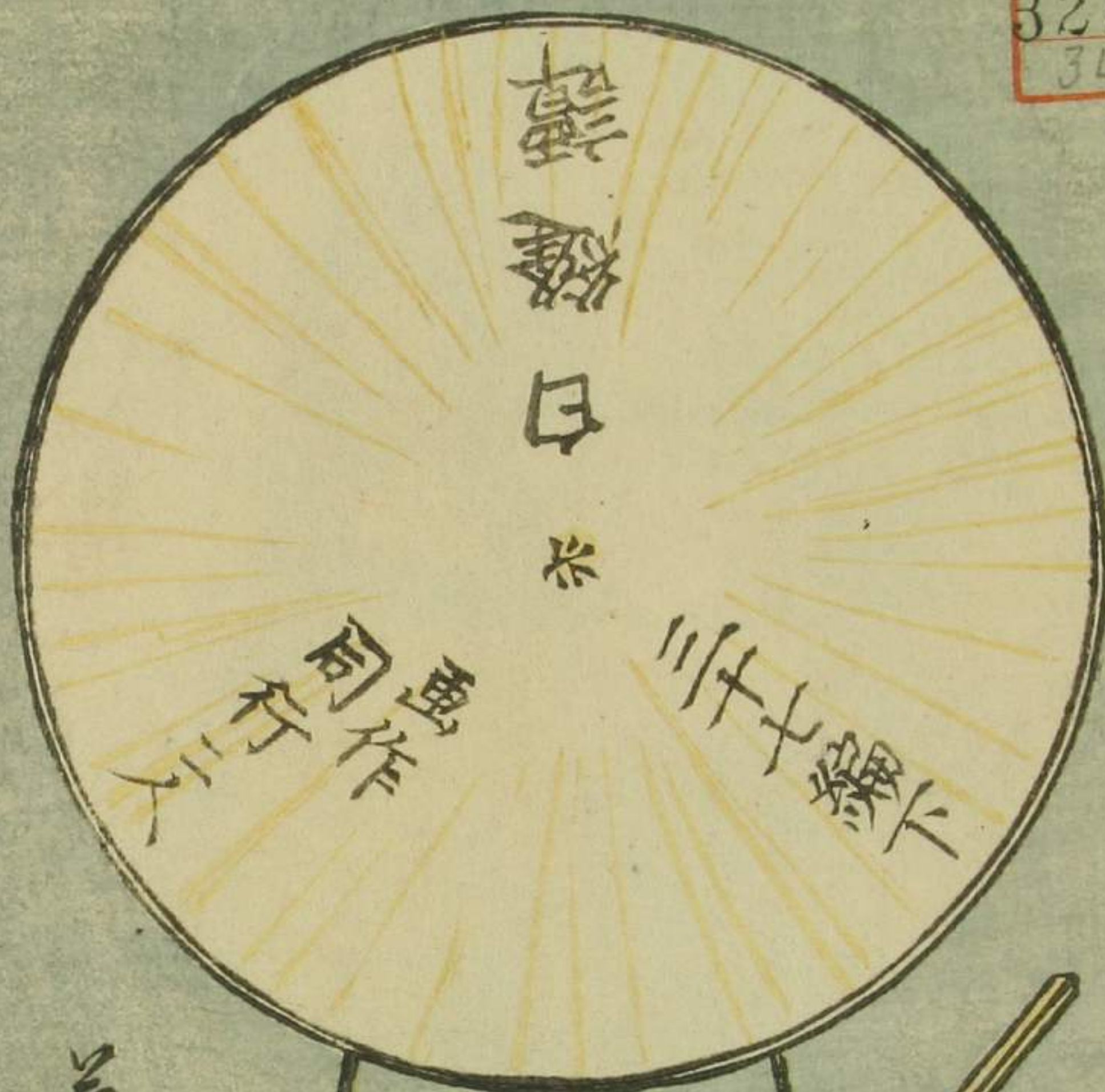
種元廣圖

三十七編下

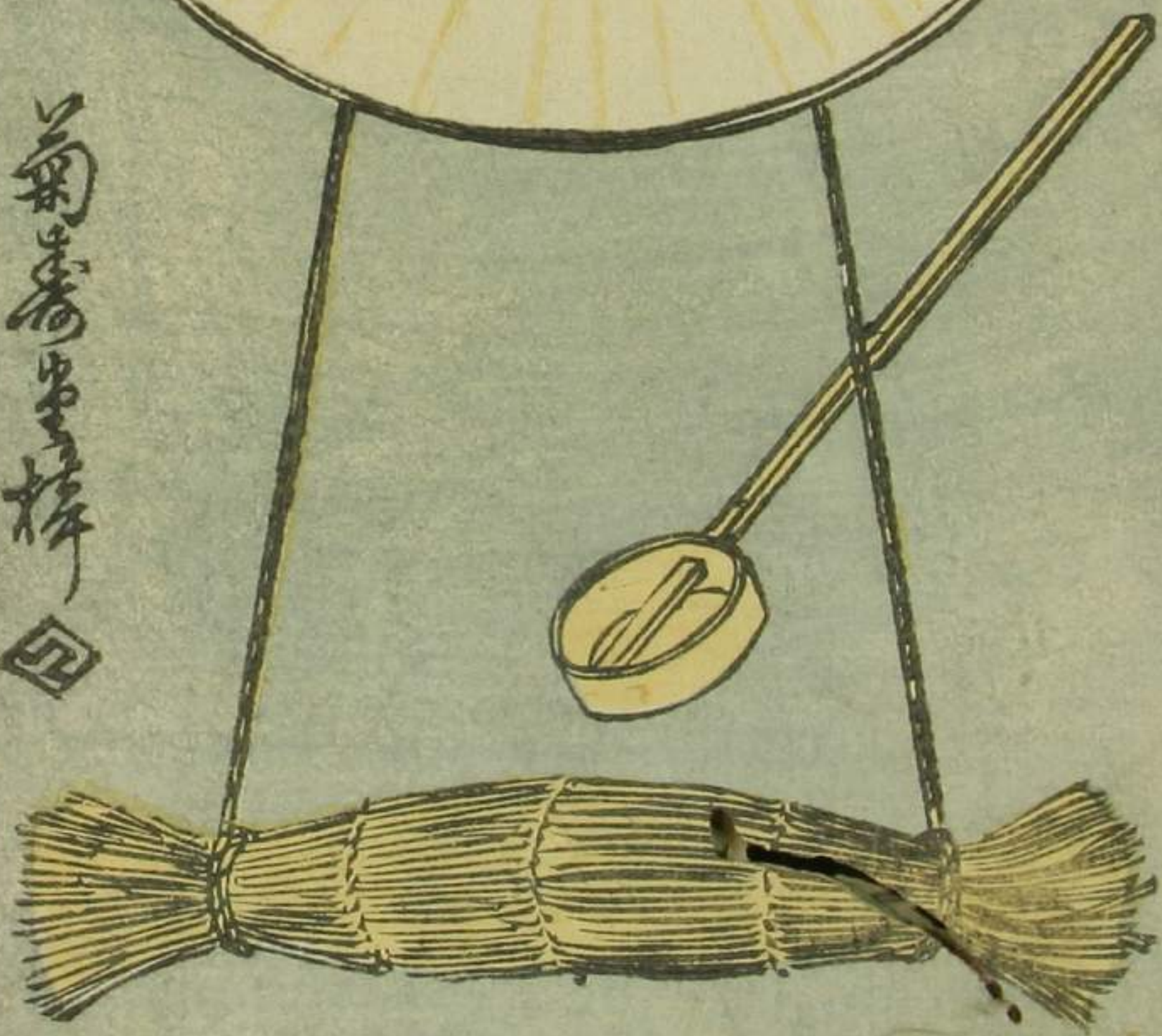


三十七編上

へ13  
3223  
34



菊島屋様



肥前風土記を閲する小昔佐喜郡小大なる樟樹有朝日の影ふ八軒身那の

浦川山を蔽ひ暮日の影ふ養父郡の草横山を蔽ふと日本武尊交羊の

時茂く栄あるさるをえんひこを栄の国といとのまひより郡名とす

文字の後小改らると有其樟へ今ひもと夫と土臺小化石の洞根も葉もあ

まきり造るが戯作老樹の媪が子婦小逼る梢小巽時の蕪葉見鐸振る

巫女の光儀を且此編の口画小出せの産まぬ前の襖祿評さると不讀でも

大方分解る安達原う一冢う石の枕も化石もいづれ小重た筆づひ石の縁ある

其盤の胞衣桶底を拂つて案トも磬まど横槌も姪むとの小當年の国の

ある歳ありたひぎれるまゝいそれと然もお釈迦の誕生日産湯の甘露小筆

を潤腹帯メく稿を起すハ物のかこのま

文三新版同二年四月稿成



柳亭種彦



文三新版同二年四月稿成



老樹姥

遊女揚羽  
いづぢよ  
あげえ





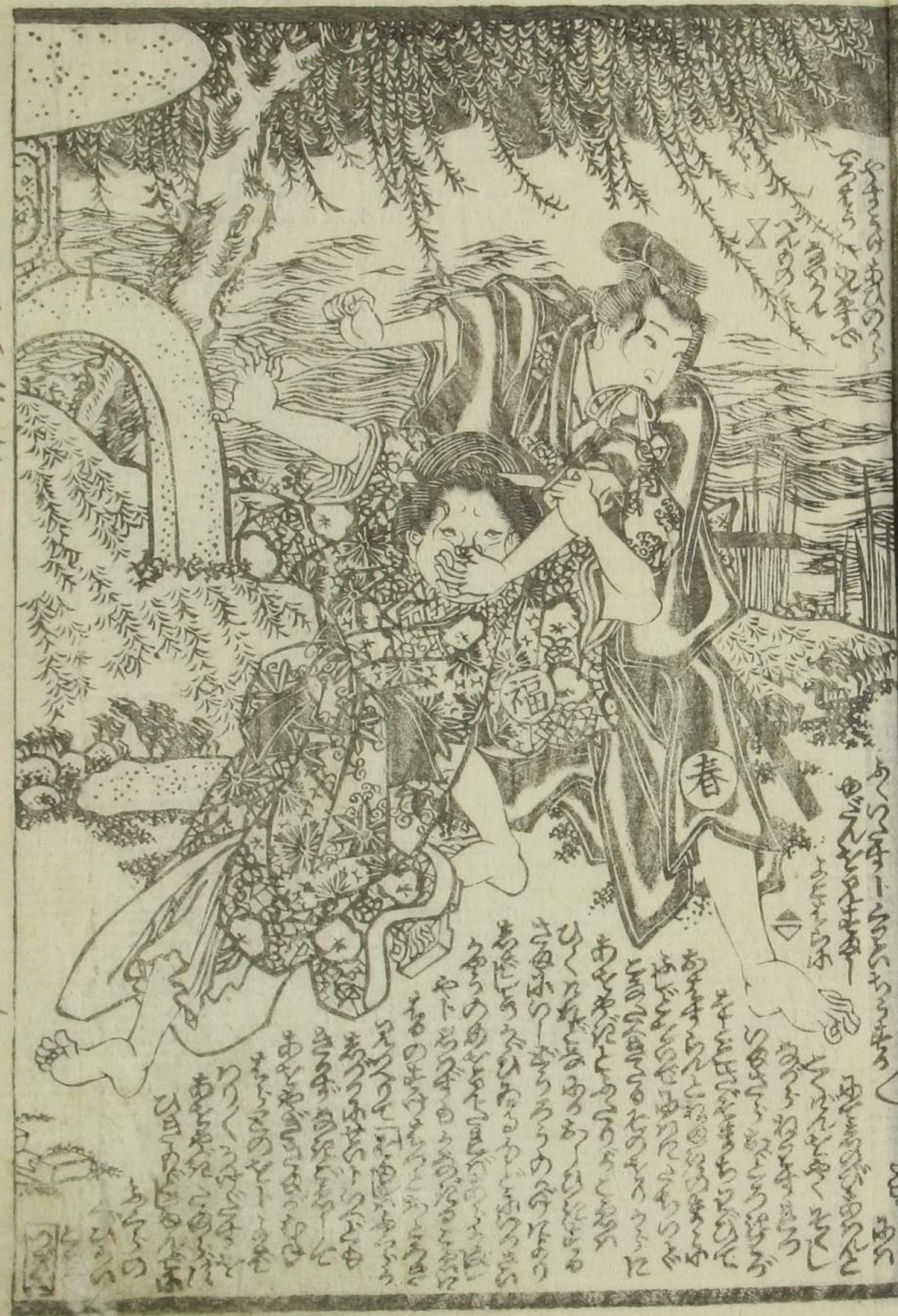








春の八三十七



春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七  
春の八三十七



春の八三十七



山支  
次め  
ぶん  
ごが  
東京  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま



情死は  
情死は  
情死は  
情死は  
情死は

東海  
東海  
東海  
東海  
東海



ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

三笠山  
豊後國  
山中  
職金  
争ひ  
刃傷の処

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

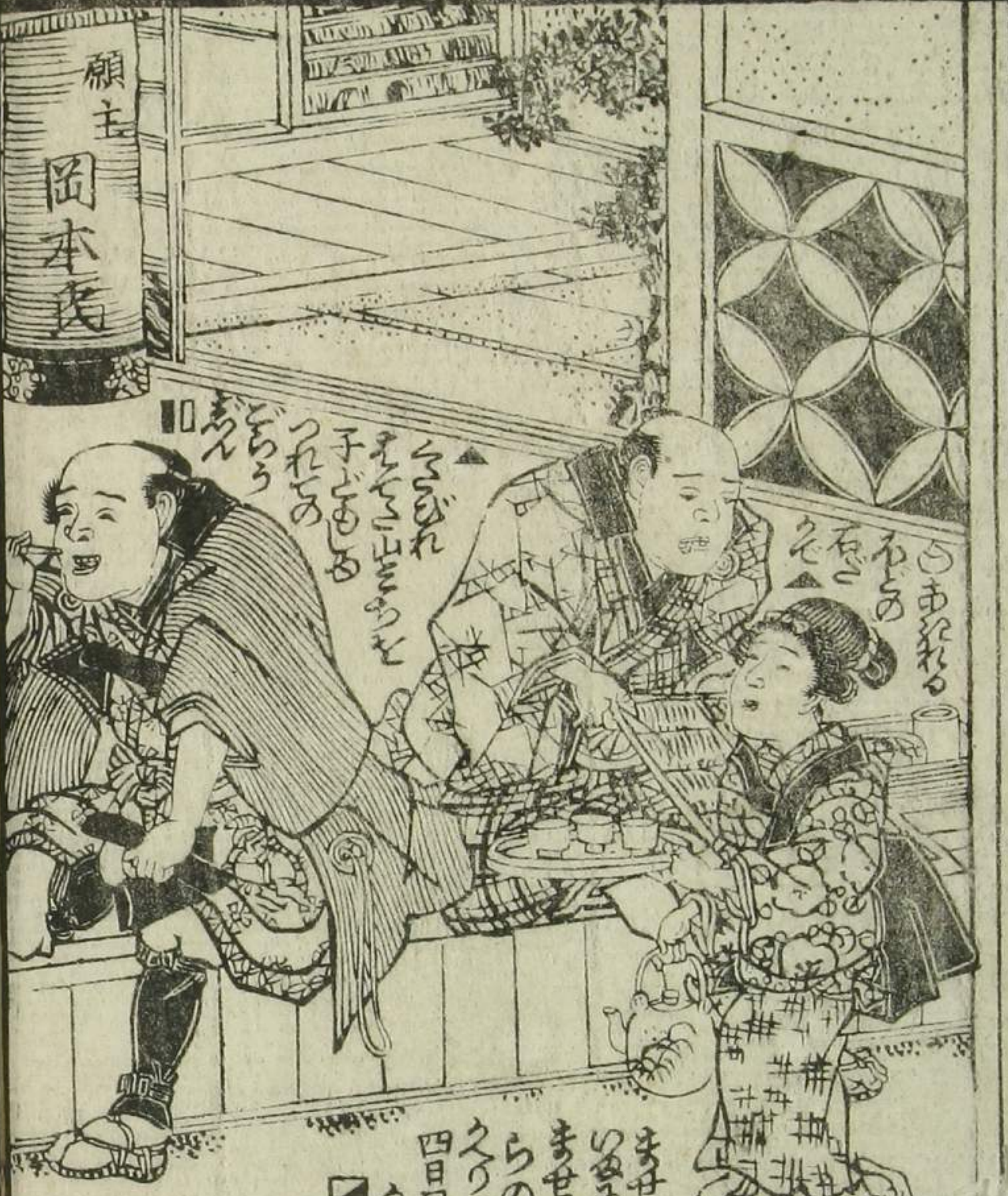




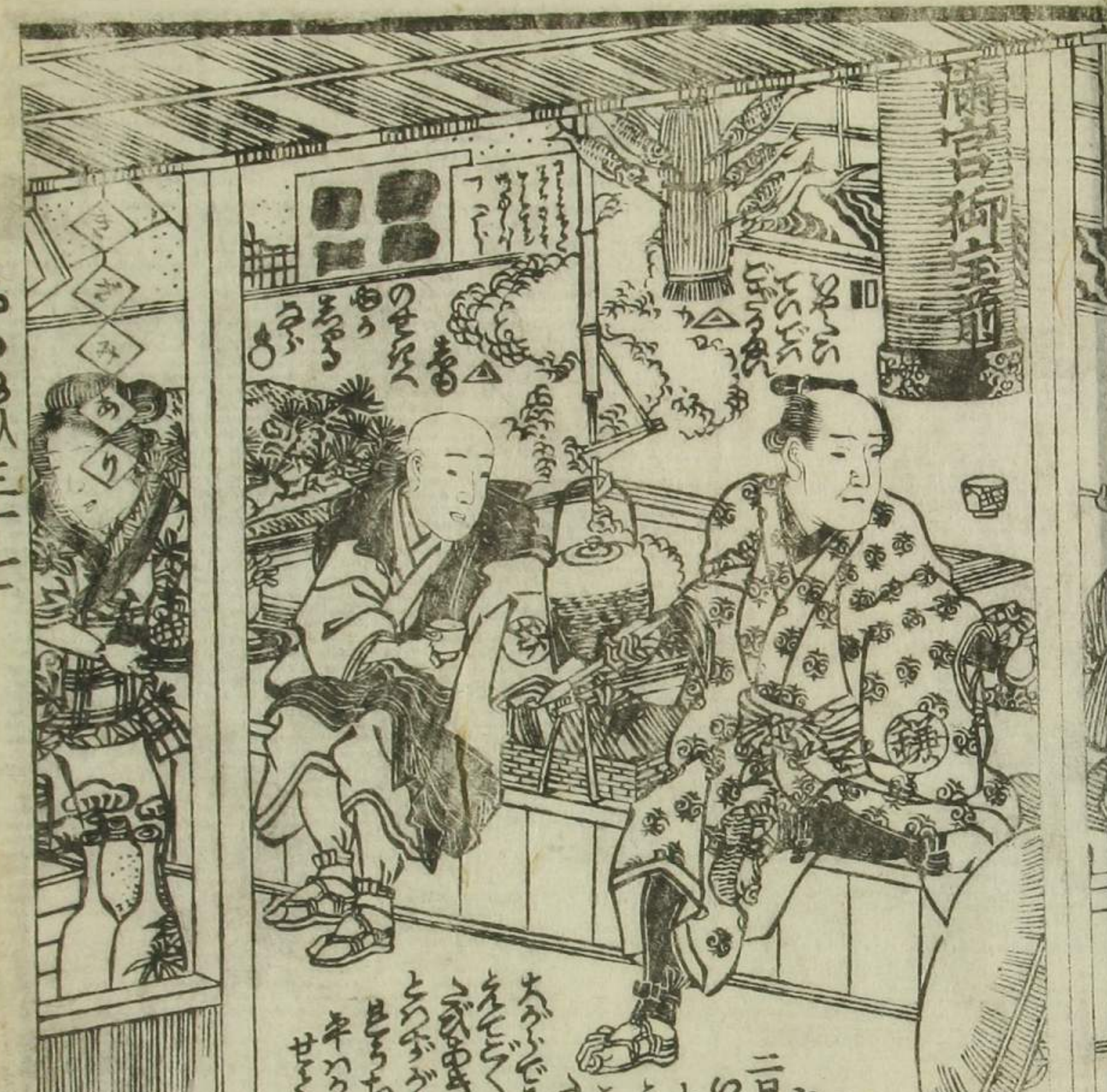
お茶の湯

石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯

お茶の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯



願主 岡本氏  
お茶の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯



お茶の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯

お茶の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯

お茶の湯  
清々湯  
石の湯  
清々湯

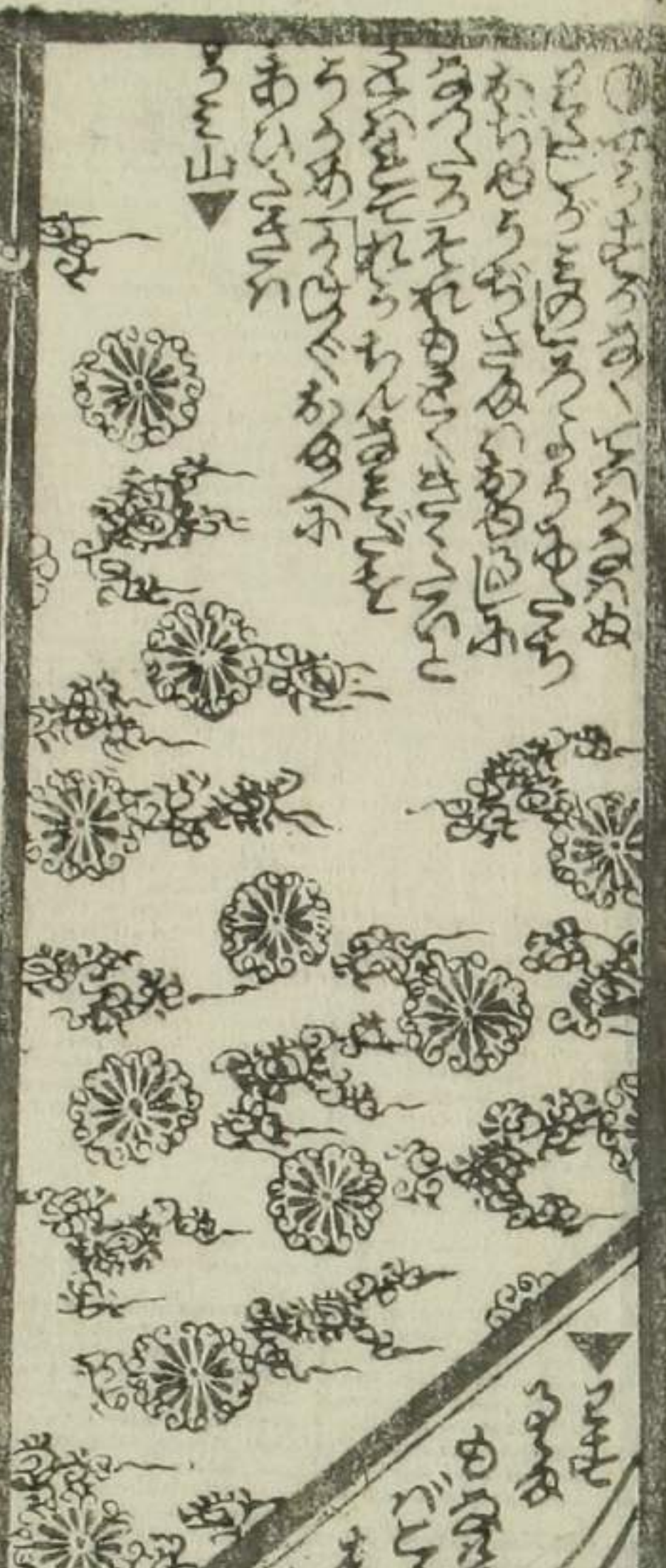








Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a dialogue or narrative related to the illustration.



Vertical columns of handwritten Japanese text, continuing the narrative or dialogue.



Vertical columns of handwritten Japanese text, continuing the narrative or dialogue.

Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or chapter reference.



一市  
The text below the illustration on page 4 consists of several columns of vertical Japanese characters. It appears to be a dialogue or a narrative description related to the scene above. The characters are in a traditional cursive style.



The text below the illustration on page 5 continues the narrative. It is written in vertical columns of Japanese characters, following the same style as page 4. The text likely describes the actions and thoughts of the woman depicted in the image above.



三十七

文船川部屋の主人は、  
 海園の酒を賣つてゐるが、  
 此の酒は、昔から有名で、  
 味もよく、氣味も爽やかなので、  
 多くの人に愛飲されてゐる。  
 主人も、此の酒の味を、  
 何年か経つては、  
 忘れてしまつたが、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。

三十七



三都止の掃水は、  
 昔から有名で、  
 味もよく、氣味も爽やかなので、  
 多くの人に愛飲されてゐる。  
 主人も、此の酒の味を、  
 何年か経つては、  
 忘れてしまつたが、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。  
 主人は、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつたので、  
 此の酒の味を、  
 思い出さうと思つて、  
 昔の味を再現しようと、  
 試みたが、なかなか出来ず、  
 とうとう、  
 此の酒の味を、  
 思い出さなかつた。

三十七

十五









あね心

えむのしり

三千七編

ニ多画



英浦密封残  
青柳へかるもの  
変も次縮小記

あね心  
えむのしり



種彦作  
芳幾画

白經  
柳亭種彦作  
一惠齋芳樂画  
菊壽堂發兌

新板  
皇龍脚  
賣出  
白心



ぬい  
毛の

一  
良



三十八編上

寛元慶長



一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十

若菜姫 変形  
山處女 蟬羽

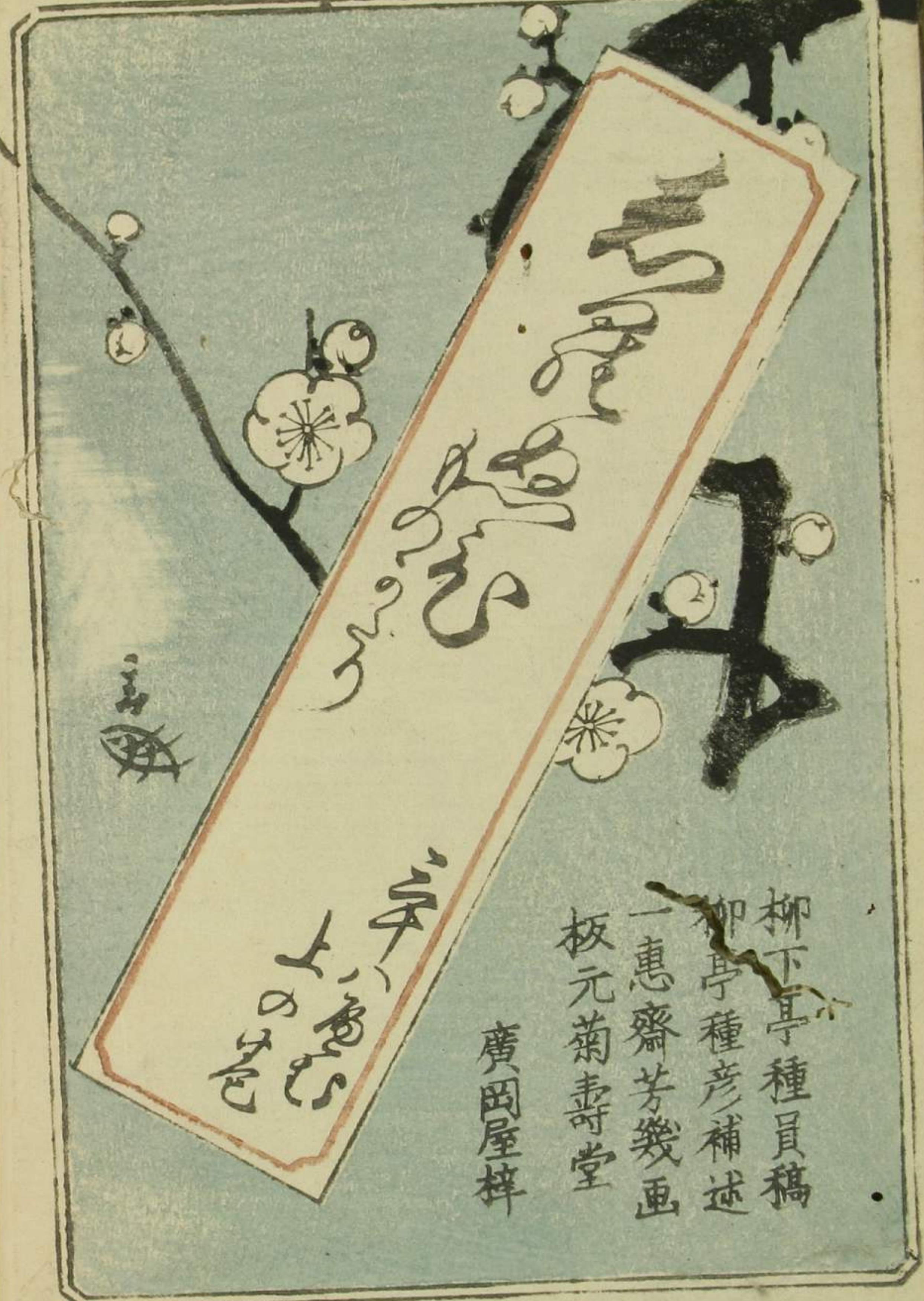


貨狄崎の船を得造らし吉備  
公崎の野馬堂の詩を得詠する  
袖受て待人の吉非一瓜小細  
目乞巧の應驗子實小蛛知ある虫を  
盡を生か物なる故人艶る大立者の道  
具不用妖術小愛形をとりて其  
構思感念に余統詔の任るをね道  
とぬ縁の糸柳彼蛛細おどり纏り一  
葉の舟の艦乗とも乱字の詩より  
散糸一筋を分る至て難  
奠の吹流一長はく残手柄顔  
舞めの魚様の下北白空を虚も  
あうれどと声も言ふぬ数々を養

柳亭種彦



柳下亭種員稿  
柳亭種彦補述  
一惠齋芳幾画  
板元菊壽堂  
廣岡屋梓





一 胡



忠照



雙喜英浦



仇村稻次

弟子如女見

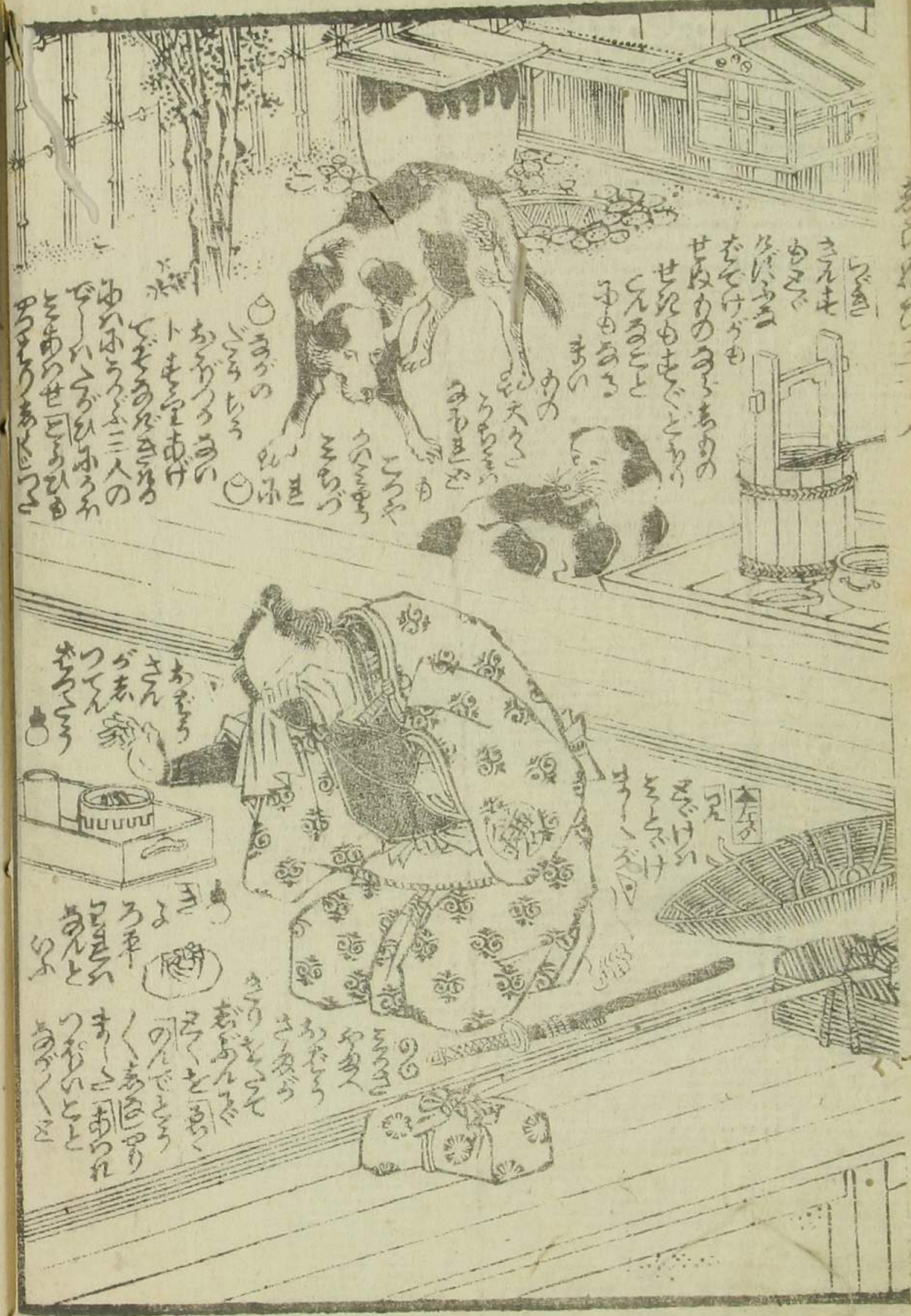


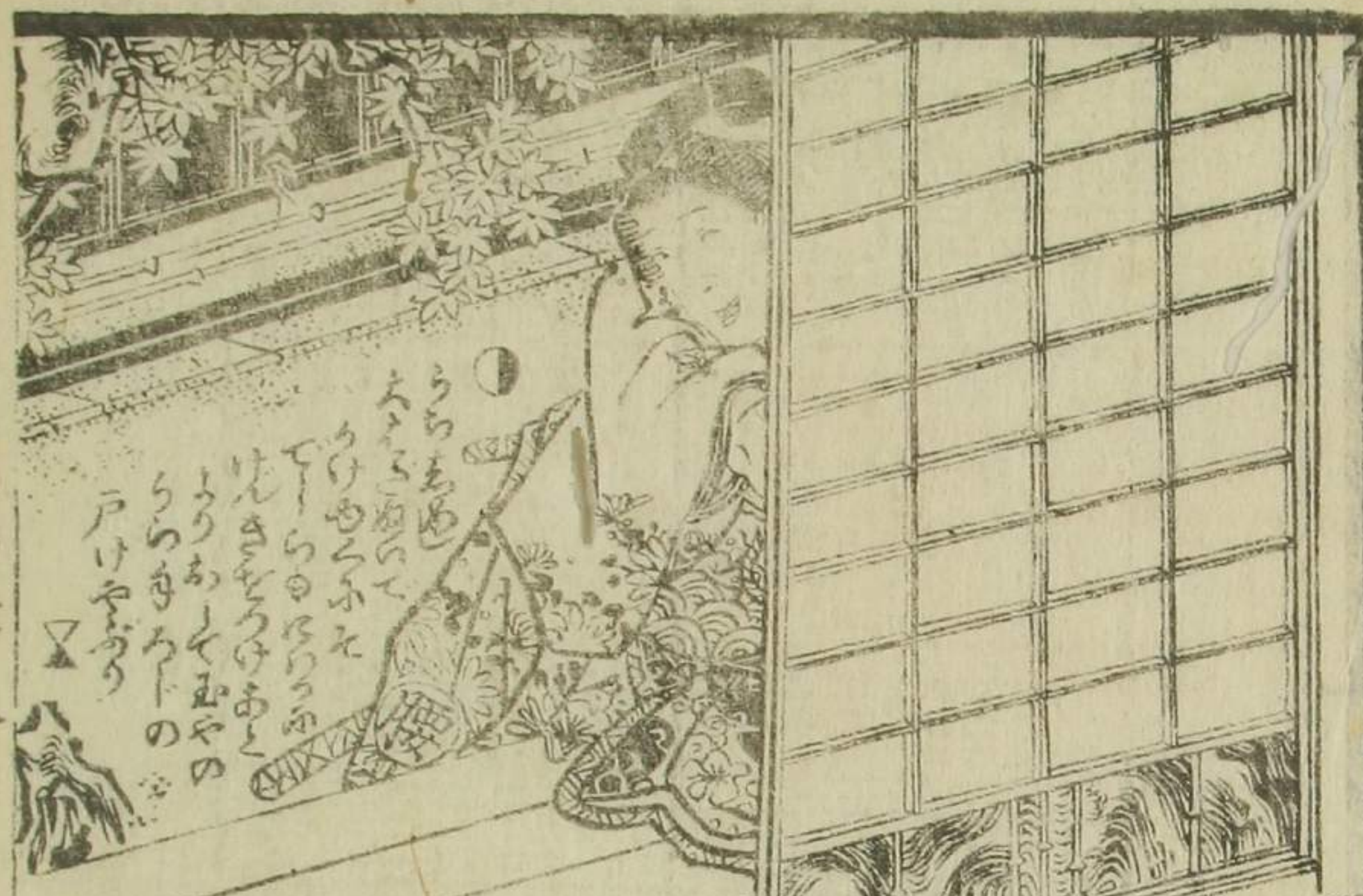












うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと



うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと



うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと

うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと  
うらも  
ふと



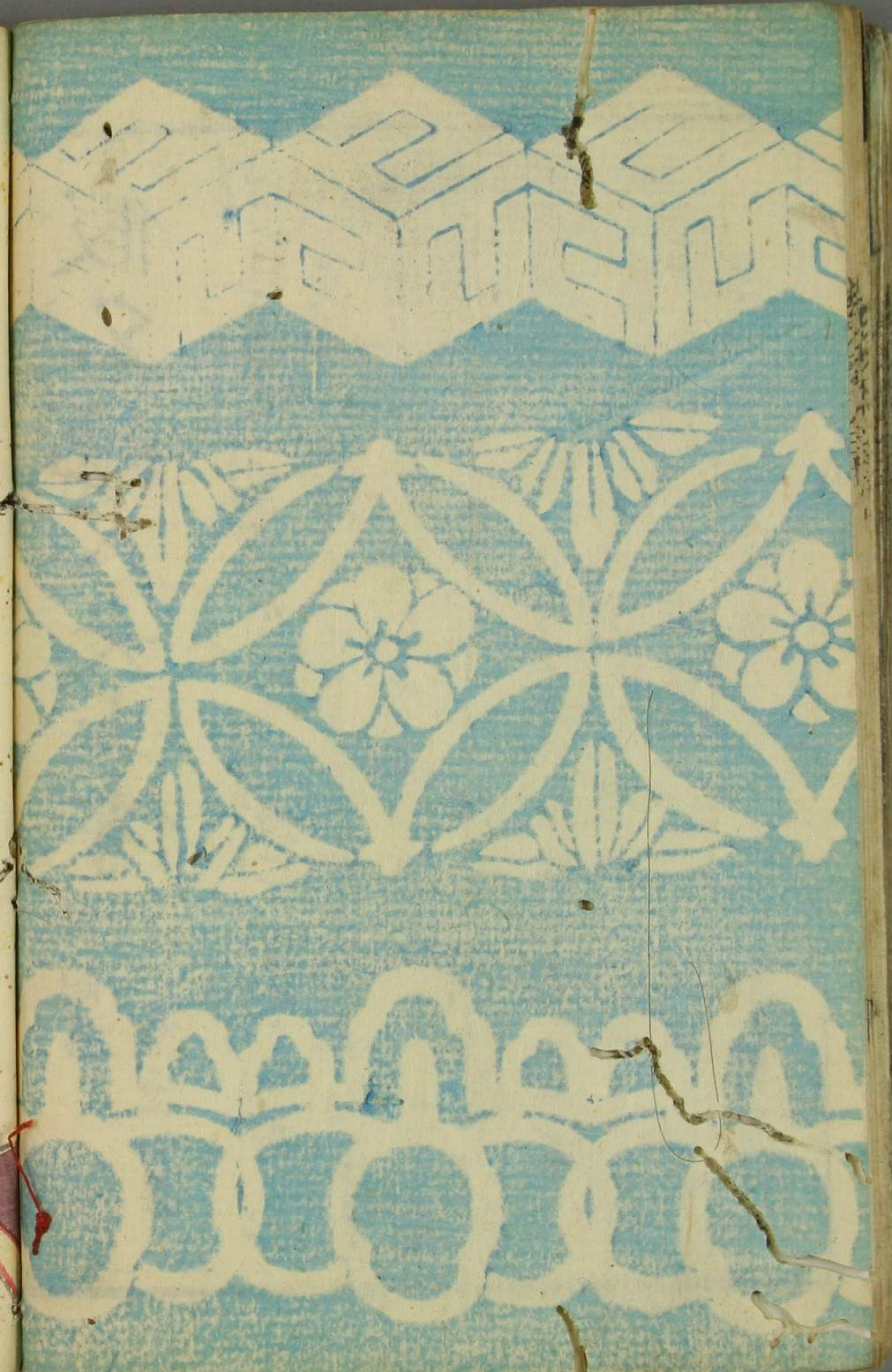


老の作  
よの舞

三十八編下

菊の巻

あつ





上の三... (Vertical text column)

白ね乙

柳多様ひこ作

有齋よき〜歳重

三十八編

亥亥新録



印 (Seal)



Handwritten text at the top of the right page, likely a title or chapter heading.

Vertical columns of handwritten text on the upper left side of the right page.



Vertical columns of handwritten text on the lower right side of the right page.

Vertical columns of handwritten text on the upper left side of the left page.



Vertical columns of handwritten text on the lower left side of the left page.



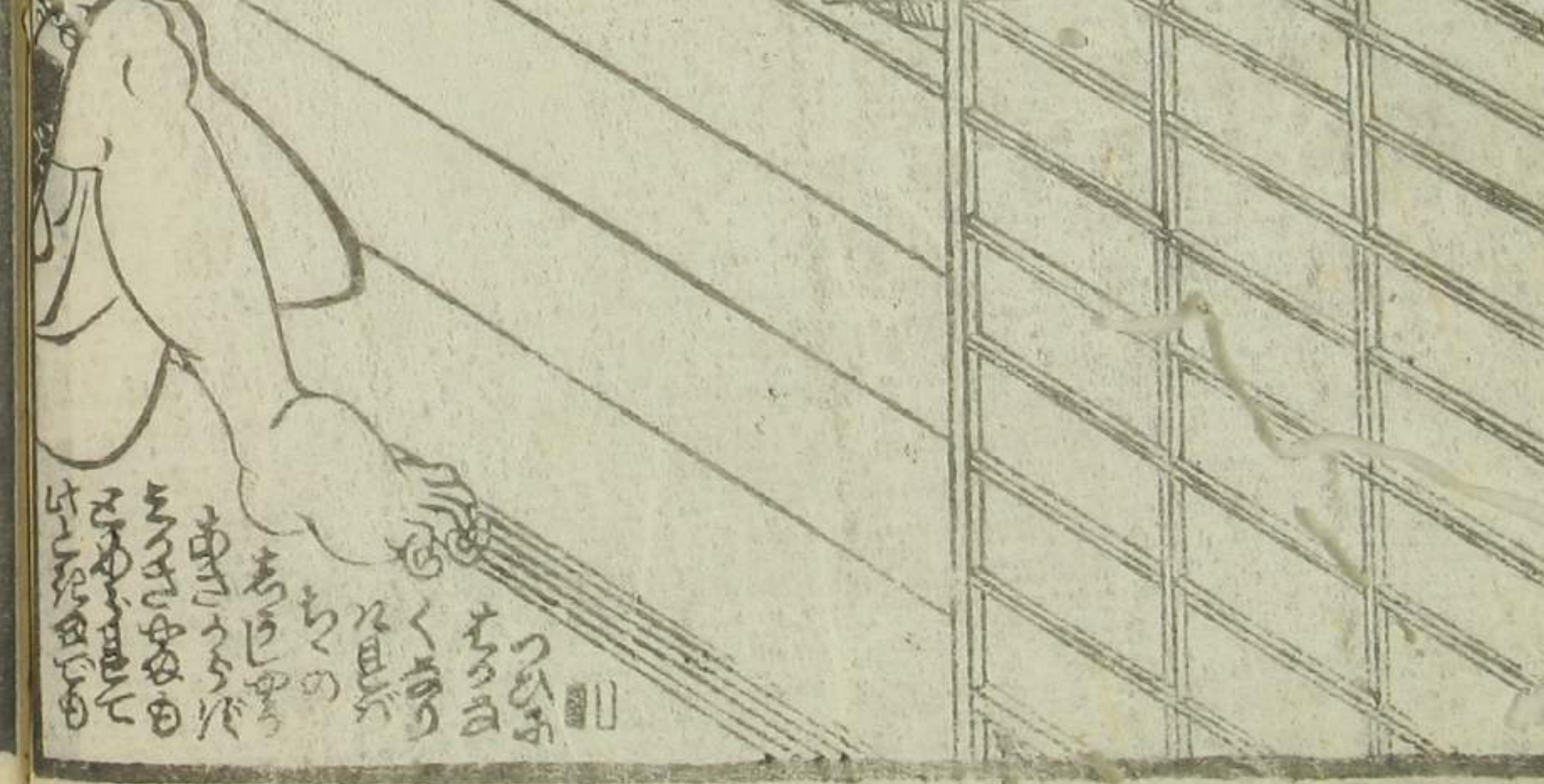
細江保大夫



細江保大夫  
あひをひ死  
たむしのあ  
いふあふ  
あ



あつちのよみきくひのち  
あつちのよみきくひのち



あつちのよみきくひのち  
あつちのよみきくひのち



あつちのよみきくひのち  
あつちのよみきくひのち



あつちのよみきくひのち  
あつちのよみきくひのち



初一やちとせり  
たのしみあり舟

子どりの  
はのしめり下すまき  
はめささげの  
はつとせり  
よりのめり

まの  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ



赤  
赤  
赤  
赤

あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ

あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ

あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ  
あつじ



三の... 四の... 五の...  
 六の... 七の... 八の...  
 九の... 十の...  
 十一の... 十二の...



生 生 生  
 生 生 生

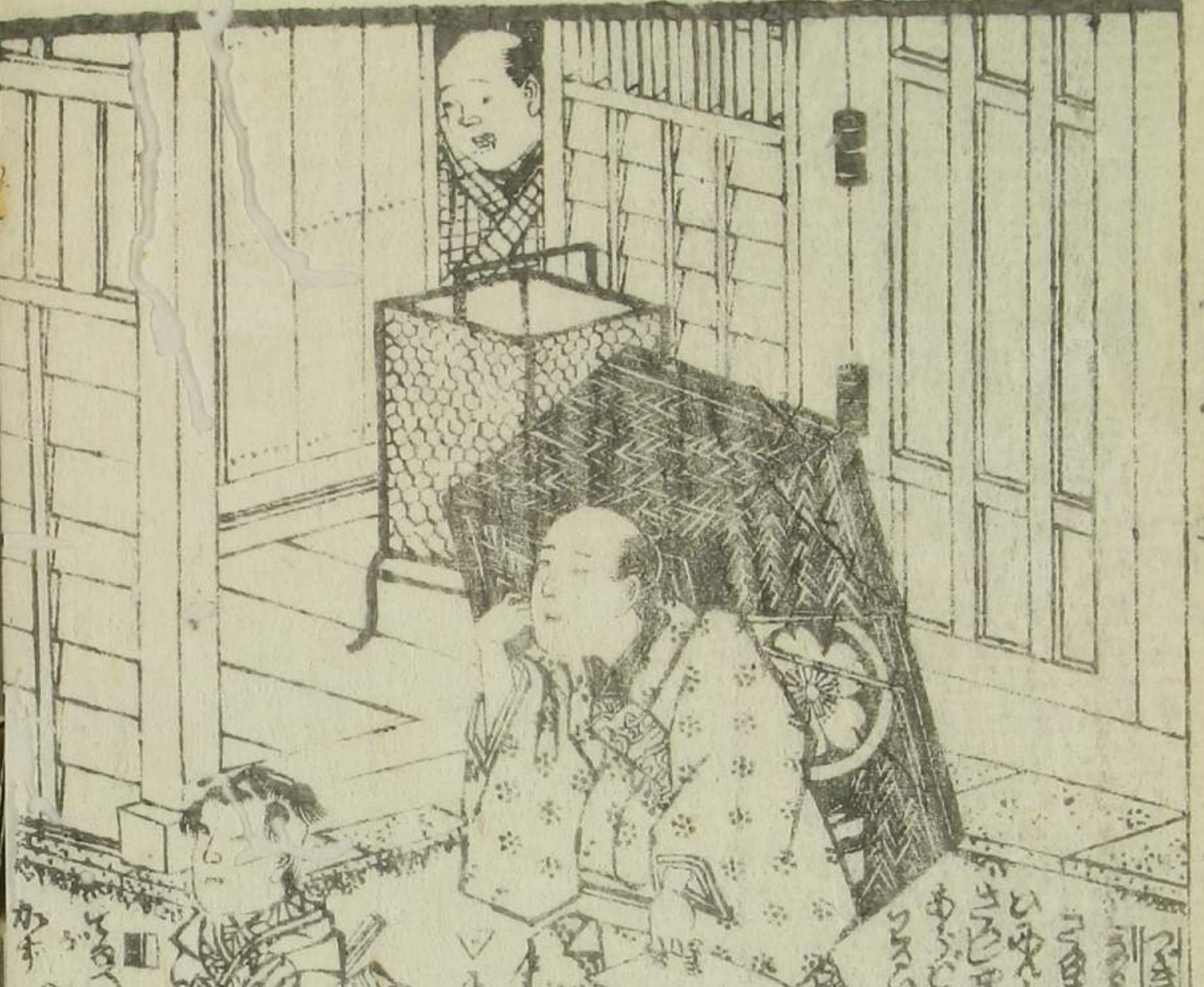
生 生 生  
 生 生 生  
 生 生 生  
 生 生 生  
 生 生 生  
 生 生 生

○... 〇... 〇...  
 〇... 〇... 〇...  
 〇... 〇... 〇...  
 〇... 〇... 〇...  
 〇... 〇... 〇...  
 〇... 〇... 〇...





Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of a play or a diary entry. The text is arranged in vertical columns, starting from the right side of the page and moving towards the left. The characters are small and densely packed.



Handwritten text in a cursive style, continuing the narrative from the previous page. The text is arranged in vertical columns, starting from the right side of the page and moving towards the left. The characters are small and densely packed.

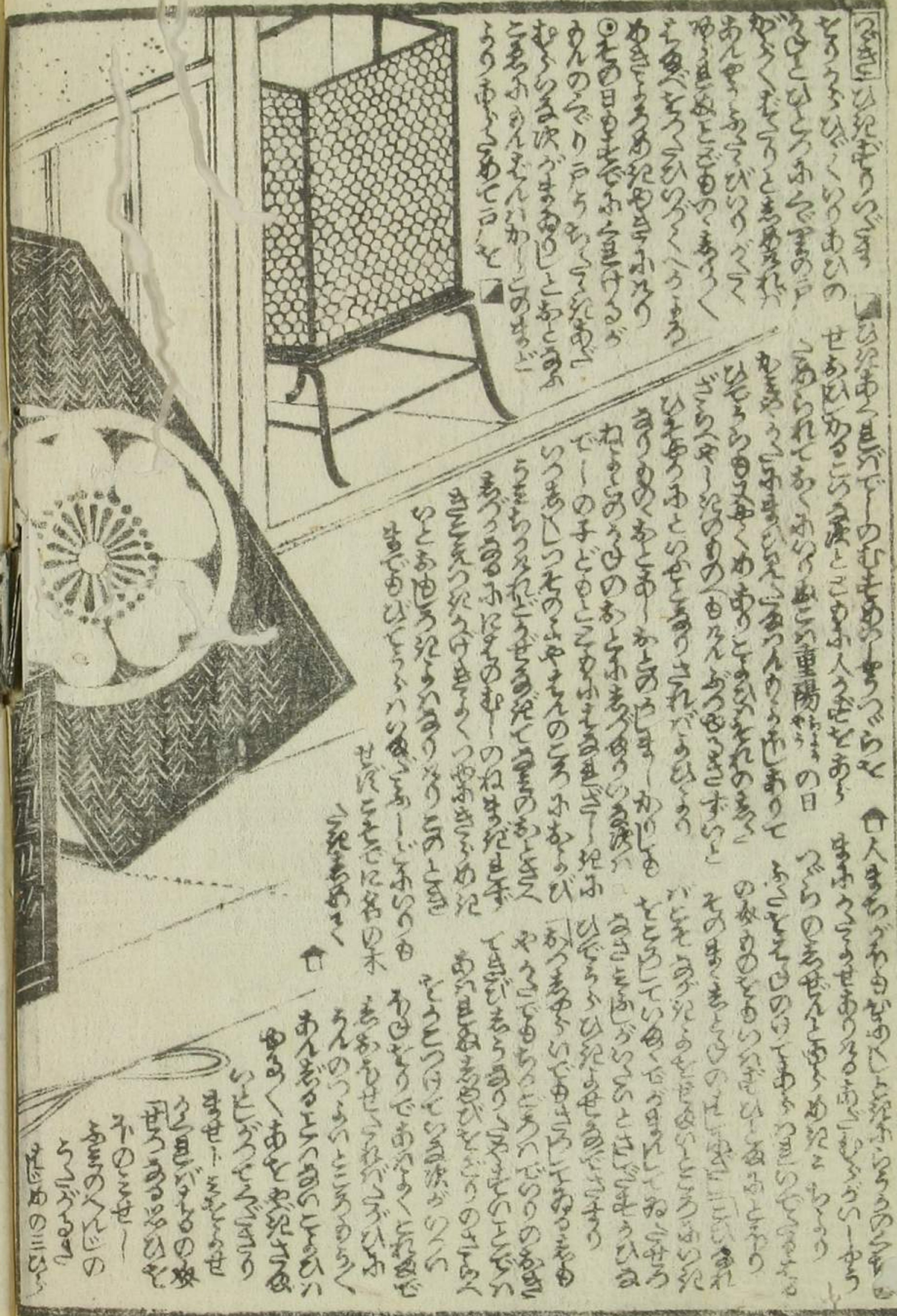
Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or a title. The characters are larger and more distinct than the main text.

Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or a title. The characters are larger and more distinct than the main text.



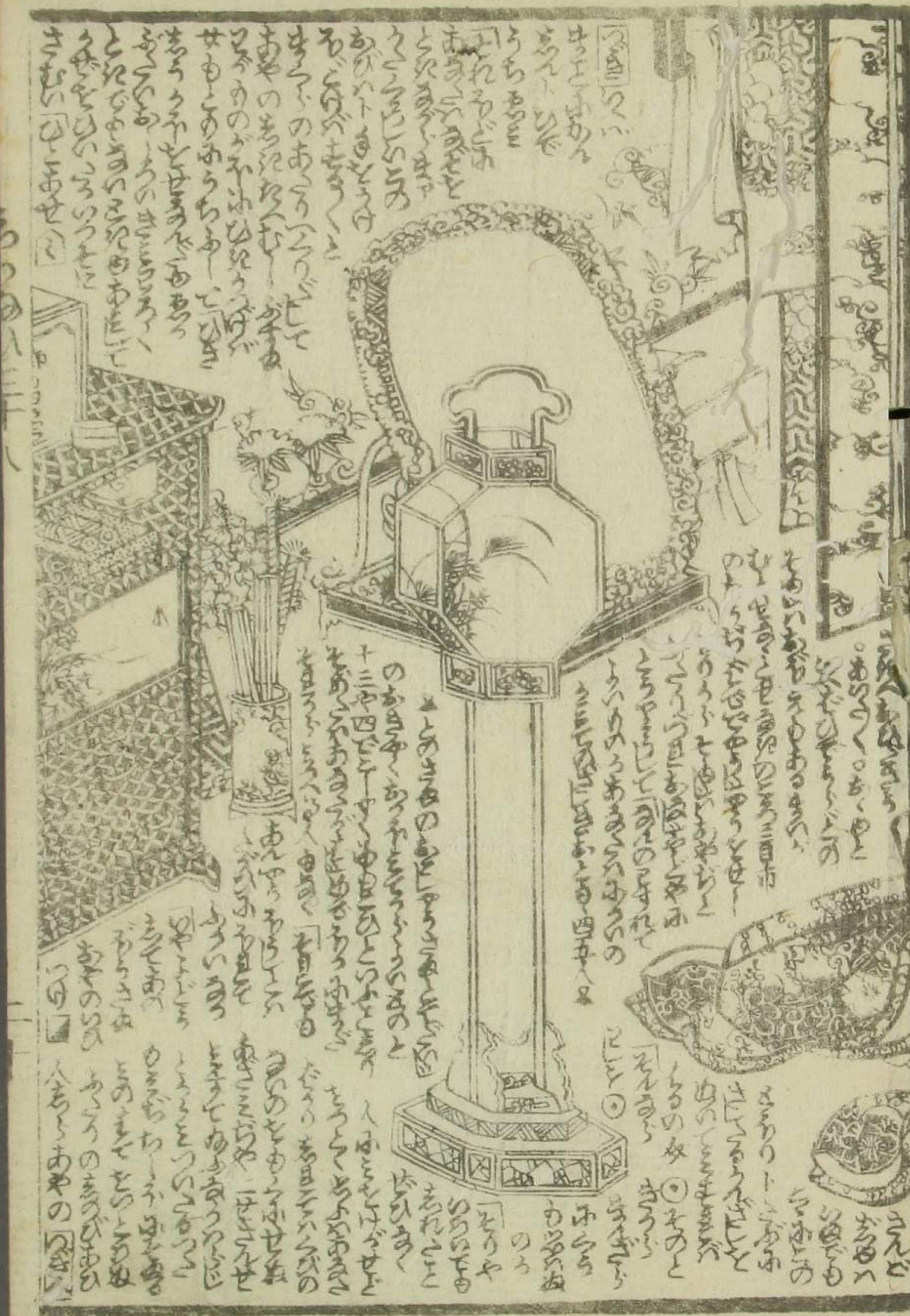
此の如きもの  
 ありては  
 人の心  
 安んずる  
 ことなし  
 故に  
 此の如き  
 ものを  
 多く  
 置く  
 こと  
 宜し  
 也

此の如きもの  
 ありては  
 人の心  
 安んずる  
 ことなし  
 故に  
 此の如き  
 ものを  
 多く  
 置く  
 こと  
 宜し  
 也



此の如きもの  
 ありては  
 人の心  
 安んずる  
 ことなし  
 故に  
 此の如き  
 ものを  
 多く  
 置く  
 こと  
 宜し  
 也

此の如きもの  
 ありては  
 人の心  
 安んずる  
 ことなし  
 故に  
 此の如き  
 ものを  
 多く  
 置く  
 こと  
 宜し  
 也



Vertical columns of Japanese text surrounding the illustration on the left page. The text is written in a cursive style, likely a playbill or a descriptive text for the scene. It includes names like "Carpenter" and "Dancer" and describes the setting and the figures.



Vertical columns of Japanese text surrounding the illustration on the right page. The text continues the narrative or provides details about the scene and the characters. It includes names and descriptions of the setting.

Vertical column of Japanese text on the right margin, possibly a title or a chapter heading.

Vertical column of Japanese text at the bottom right, likely a page number or a section marker.







云笈八編  
上  
下

